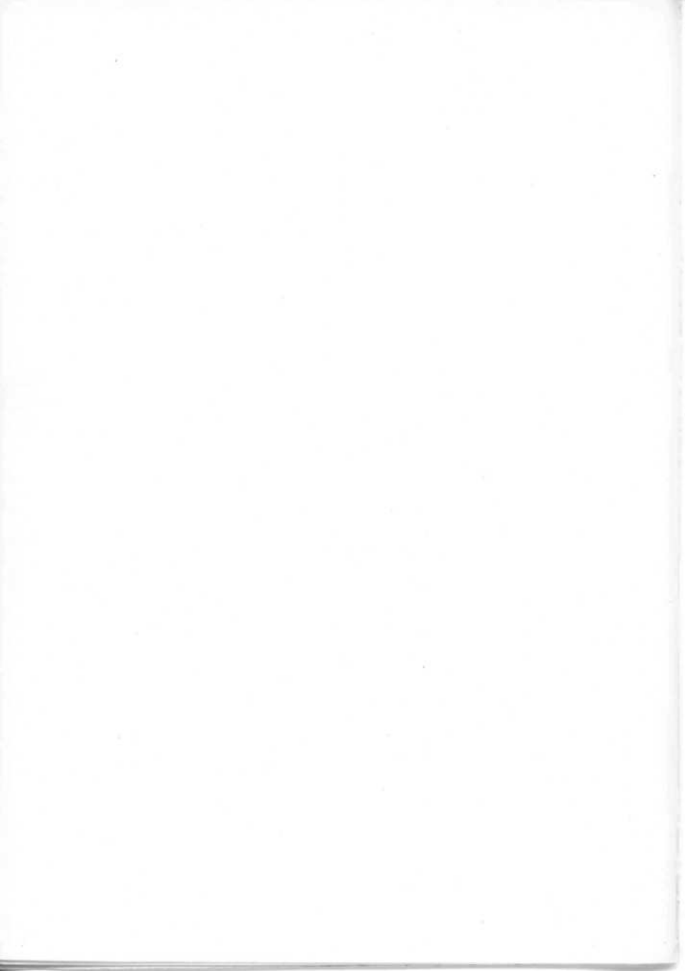
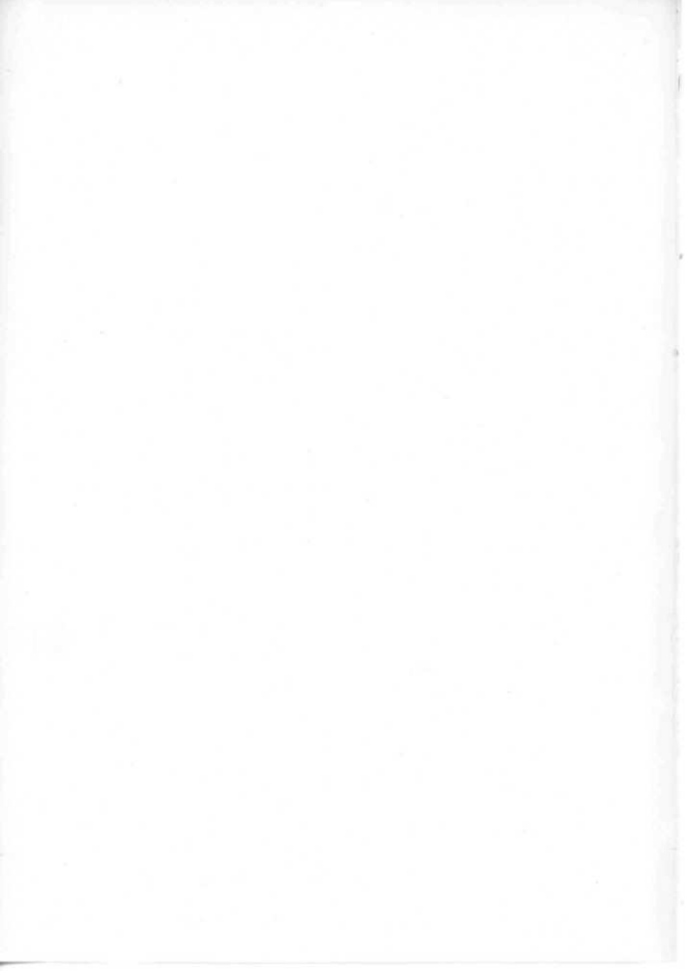


戸田市文化財調査報告XV

鍛冶谷・新田口遺跡第3次発掘調査概要

埼玉県戸田市教育委員会





ごあいさつ

教育長 岡田 弘

昭和42年の夏に始まる戸田市の一連の発掘調査事業は、それまでの県南地域に対する歴史的認識に少なからぬ修正を迫る幾多の成果をもたらしました。

その詳細については既刊の報告書に委ねるとして、その成果を現実の市民生活の中でどのように位置づけるかは、ひとり学校教育上の課題であるばかりか、新幹線と通勤新線の開通を目前にして激変の時を迎えつつある本市の町づくりの発想の中でも、深くその精神面を支えるものとしてこれができるだけ有効に活用する工夫があつてほしいものです。

丁度今次の市の事業と時を重ねて、県埋蔵文化財調査事業団による発掘のことがあり、両者の明らかにした状況によると、この鍛冶谷・新田口遺跡は十数年前の発掘当初に想像していたより遙かに規模の大きなものようであり、新たに勾玉や長大な木製梯子の出土などの成果を含めて、戸田市の歴史はいよいよ興味をそそるものとなって来そうに思われてなりません。

この秋に開館予定の戸田市立郷土博物館が、このように原始・古代の歴史の中に於ても意外な事実を秘める当地発祥の経緯について市民の関心をさらに大いに掻立ててくれるよう心から願わずには居られません。

最後に本事業の遂行にさいして適切な御指導と御協力を賜りました埼玉県埋蔵文化財調査事業団をはじめとする関係各位に対し、改めて感謝の念を表明いたします。

例 言

- 1 本書は、埼玉県戸田市上戸田5丁目所在の「鍛冶谷・新田口遺跡」の第3次発掘調査報告である。
- 2 発掘調査は、戸田市教育委員会が主体となり実施したものである。調査期間は、昭和57年10月5日から10月30日までである。
- 3 発掘調査は、伊藤和彦、常井糸枝が担当し、領塚正浩、今成進一、堀江清隆がその補佐にあたった。
- 4 本書の図版作成は、領塚、今成、堀江があたった。また、写真は、遺構を島田一廣氏に撮影していただき、遺物は、領塚、今成、堀江が撮影した。
- 5 本書は、伊藤、常井、堀江、領塚、今成が執筆し、伊藤が加除筆した。
- 6 本書の遺物、遺構覆土の色調は、農林省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」によった。
- 7 本書作成にあたり、以下の方々から御協力を賜った。

毒島正明氏、陣内康光氏、西口正純氏、坂野和信氏

〔整理協力〕

京華高等学校考古学研究部、埼玉県南フィールド考古学研究会、荒川低湿地研究会、狭山丘陵考古学研究会、戸田市市史編さん室、戸田市立郷土博物館

- 8 本書の編集は、戸田市教育委員会社会教育課が行った。

- 9 発掘調査参加者

西川貞子、真下弘子、佐藤妙子、能登陸子、頓所佐金吾、岡崎久子、今井朝子、遠藤敏子、高松国光、高松テル子、吉田シツ、関泰子、竹井君江、小山房子、大村キヌ枝、伊藤吏、五十嵐紀志子、佐藤公子、今政江、野村尚三、坂本秀子、内田久子、広瀬幸子、鹿谷祥子、石坂律子、矢鳥知子、油屋陽子、稲葉洋子、島田敷、浅香元広、栗田政子、松本歌子、今井巖、羽鳥千代子、原秀子、本橋恵子、関恂子、前口英明、羽入哲也、関儀助、滝沢マサ子、伊藤久子、滝沢勉、栗原明夫、砂田時子

鍛冶谷・新田口遺跡第3次発掘調査概要

目 次

ごあいさつ

教育長 岡 田 弘

例 言

第1章	はじめに	3
第1節	発掘調査に至る経緯	3
(1)	第1次調査及び第2次調査の結果	3
(2)	第3次調査に至る経緯	3
第2節	遺跡の位置と環境	3
第2章	遺構と遺物	4
第1節	C区の遺構と遺物	4
第2節	D区の遺構と遺物	7
第3節	E区の遺構と遺物	15
第3章	ま と め	28

第1章 はじめに

第1節 発掘調査に至る経緯

(1) 第1次調査及び第2次調査の結果

昭和42年4月25日、当時畑であった現地に鯉のぼりのポールを立てようとした市民が、偶然にも1片の弥生式土器片を発見した。この出来事を発端に、鍛冶谷・新田口遺跡における発掘調査が開始されたのである。

戸田市教育委員会では、弥生式土器の発見を重視し、この遺跡の解明のため慎重な発掘調査の計画を行った。そして柳田敏司氏、塩野博氏を担当者として、昭和42年8月6日～11日にかけて第1次調査が行われた。さらに昭和43年7月26日～8月2日にかけて第2次調査を実施した。

その結果、弥生時代後期の方形周溝墓1基、古墳時代前期の方形周溝墓11基、古墳時代前期の住居跡1軒、その他溝状遺構などの遺構が検出された。また、遺物としては、方形周溝墓内からは、碧玉製の管玉をはじめ多数の土器類、住居貯蔵穴内からは、横転した甕のセットなど弥生時代後期から古墳時代前期の土器が多数発見された。

(2) 第3次調査に至る経緯

現在戸田市は、東北・上越新幹線並びに通勤新線の開通に伴う都市基盤の整備を遂行中であり、とりわけ道路、下水道の整備をめざし、その事業を推進している。昭和58年9月24日から、鍛冶谷・新田口遺跡の西側の市道を下水道整備することになり、合せて9月29日隣接する民間住宅でも改築工事の建築確認申請が提出されたことにより、戸田市教育委員会が主体となり、昭和57年10月5日より30日まで発掘調査を行うことになった。

第2節 遺跡の位置と環境

(1) 鍛冶谷・新田口遺跡の位置

戸田市は、埼玉県の南端に位置し、東は川口市・浦和市、西は朝霞市・和光市、南は荒川を隔て、東京都板橋区・北区に隣接している。市域は東西約7.2km、南北約3.9kmである。

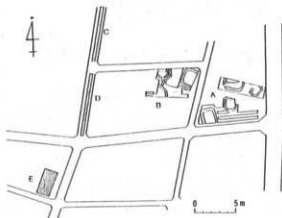
鍛冶谷・新田口遺跡は、戸田市上戸田5丁目、いわゆる五差路の北西に位置する。京浜東北線蕨駅より西方約2.3kmの地点である。

今回の調査地点は、第1次・第2次調査地域の西側及び南西部である。

鍛冶谷・新田口遺跡は、地形よりみると、大宮台地（北足立台地）と、武蔵野台地に挟まれた荒川左岸の低湿地に位置している。この低湿地は荒川低湿地と呼ばれ、旧入間川（荒川）の堆積作用によって形成された海拔3～5mのほぼ平坦地である。土質は砂を含んだシルト質の粘土である。また、旧河道に沿って黄褐色シルト質粘土を基盤とするいくつかの自然堤防が形成されているが、

住宅が密集する現在では、外見上その確認が非常に困難である。

現在知られている戸田市付近の自然堤防としては、浦和市内谷あたりから幅約800m、長さ約4kmにわたり、戸田市笹目まで南北に延びているものと、戸田市新曽から非常に不規則な形で喜沢、さらには川口駅付近まで約7kmにわたるものがあり、また隣接する蕨市にも旧中道に沿って約4kmにわたって続く自然堤防が認められる。本遺跡はこのうち、新曽から喜沢まで続く自然堤防上に存在する。



(図1) 第3次調査区概要図

第2章 遺構と遺物

第1節 C区の遺構と遺物

(1) 第1号溝状遺構

本遺構は調査区中央よりやや南方に位置しており、調査区内を北東から南西にかけて、ほぼ直線的に走っている。調査全長は約180cmであるが、調査範囲が狭いため、その全容は確認できなかった。溝断面は箱型を呈しており、上面での幅は75cm前後、底面の幅は50cm前後とほぼ一定している。確認面(ルーム面)からの深さは約54cmとほぼ水平である。しかし、これはあくまで確認面からの数値であって開削当時の規模ではない。

溝内の堆積土層は上下2層に大別でき、下層はローム粒子を少量混入する黒褐色土層、上層はロームブロックを多量に混入する暗茶褐色土層である。

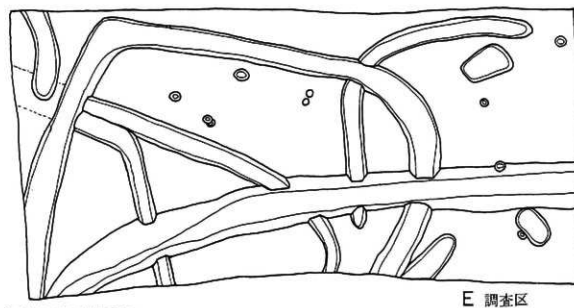
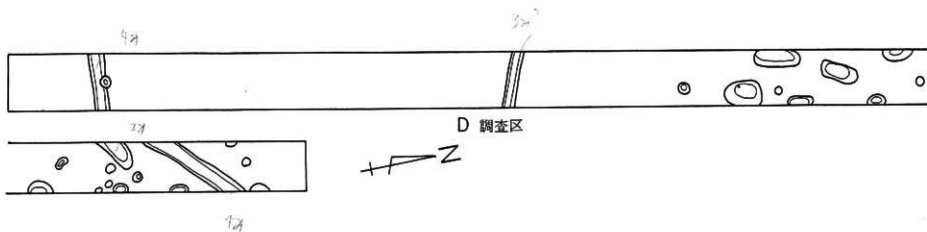
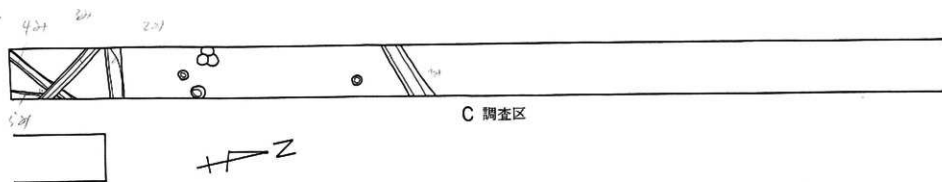
第1号溝状遺構出土の遺物

土器底部(図4)

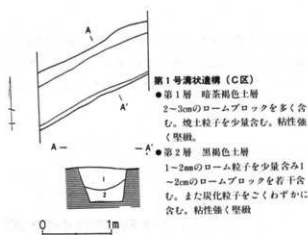
1 甕形土器或は壺形土器の底部破片である。楕円状工具による整形の後、ヘラ状工具によって器面調整を加えている。胎土には径0.5mm前後の砂粒を混入する。色調は内外面とも、にぶい橙色を呈する。

土製品(図4)

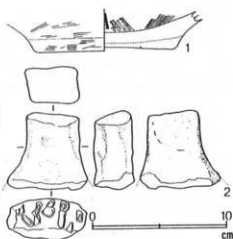
2 破損の為、形態を明確にしえない。どのような用途に用いられたかという事に就いても不明である。胎土中に混入されている鉱物は径2mm前後と大型のものが目立つ。



(図2) 発掘区遺構配置図



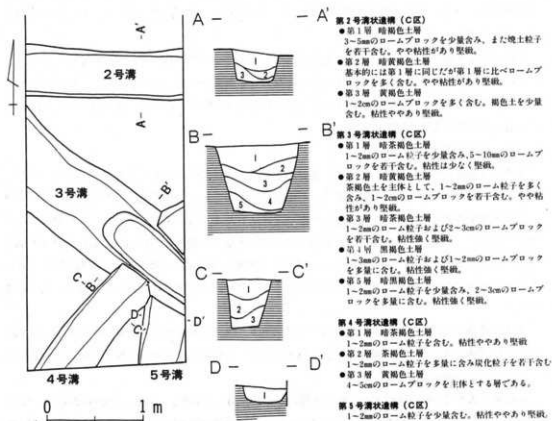
(図3) 第1号溝状遺構実測図



(図4) 第1号溝状遺構出土遺物実測図

(2) 第2号溝状遺構 (図5)

本遺構は調査区南方に位置しており、調査区内を東西にほぼ直線的に走っている。調査全長は約165cmを測るが、調査範囲が狭いため、その全容は確認できなかった。溝の断面はU字状を呈しており、上面での幅は50cm前後、底面での幅は40cm前後である。確認面からの深さは30cm前後



(図5) 第2・3・4・5号溝状遺構実測図

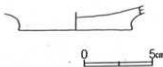
ではば一定している。

溝内の堆積状態はレンズ状を呈しているため自然堆積と考えられる。堆積土層は3層に大別することができ、最下層はロームブロックを多量に混入する黄褐色土層、その上にロームブロックを少量混入する暗黄褐色土層、最上層はロームブロックおよび焼土粒子を混入する暗茶褐色土層である。

第2号溝状遺構出土の遺物

土器底部(6図)

外面は風化によって調整痕を見ることができないが、内面はヘラ状工具によって調整が加えられている。胎土には径1mm前後の赤色粒子を混入する。色調は外面が明褐色、内面が黒色を呈する。



(図6) 第2号溝状遺構出土の遺物実測図

(3) 第3号溝状遺構(図5)

本遺構は調査区南方に位置しており、調査区内を北西から南東にかけて走っている。調査全長は約220cmを測るが、調査範囲が狭いため、その全容は不明である。本遺構は調査区東側において第4、5号溝状遺構を切っている。溝断面は箱型を呈しており、上面での幅は最も広いところで85cm、最も狭いところで76cmを測る。底面の幅は50cm前後とはば一定している。確認面からの深さは溝中央部で40cm、第4号溝状遺構との切り合い部分付近で一段落ち込んでおり、切り合い部分では75cmを測る。

溝内の堆積土層は5層に大別でき、最下層はロームブロックを多量に混入する暗黒褐色土層、その上にロームブロック及びローム粒子を多量に混入する黒褐色土層、その上にローム粒子を若干混入する暗茶褐色土層、その上にローム粒子を多量に混入する暗黄褐色土層、最上層はローム粒子を若干混入する暗茶褐色土層である。

(4) 第4号溝状遺構(図5)

本遺構は調査区南方に位置しており、北東から南西にかけてゆるやかに弧を描いている。調査全長は約180cmを測るが、調査範囲が狭く、その全容は不明である。本遺構は調査区東側において第3号溝状遺構に切られている。溝断面は台形を逆さにしたような形を呈している。北西の壁はほぼ垂直であるが、南東の壁はゆるやかに傾斜している。上面での幅は46cm前後であり、底面の幅は24cm前後で一定している。確認面からの深さは北東部で60cm、中央部および南西部では50cmを測る。南西部から中央部まではほぼ水平であるが、中央部から東北部に近づくに従って次第に深くなる。

溝内の堆積土層は3層に大別でき、最下層はロームブロックを主体とする黄褐色土層、その上にローム粒子を多量に混入する茶褐色土層、最上層はローム粒子を少量混入する暗茶褐色土層である。

(5) 第5号溝状遺構(図5)

本遺構は調査区の最も南東第4号溝状遺構の東側に位置しており、北東から南西にかけて、ほぼ直線的に走る溝である。調査全長は約100cmを測るが、調査範囲が狭いため、その全容は確認できなかった。本遺構は北東部において第3号溝状遺構に切られている。溝断面は台形を逆さにしたよ

うな形を呈しており、上面での幅は約50cmを測るが、東壁上面が調査区外にあたるため上面での正確な幅は不明である。底面の幅は南側で40cm、北上するに従って次第に狭くなり第3号溝状遺構との切り合い部付近では30cmを測る。確認面からの深さは16cm前後とほぼ水平である。

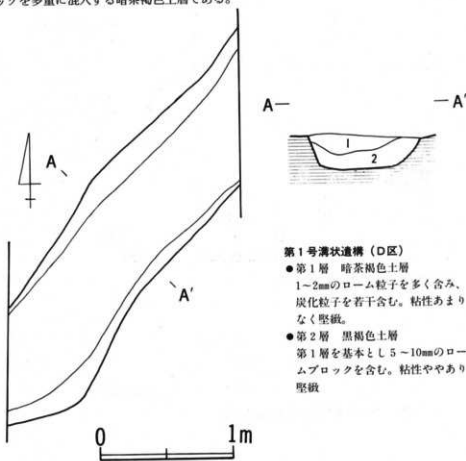
溝内の堆積土層は1層のみであり、ローム粒子を少量混入する暗茶褐色土層である。

第2節 D区の遺構と遺物

(1) 第1号溝状遺構

本遺構は調査区北方に位置しており、北東から南西にかけて、やや湾曲して走っている。また、調査区西側で南壁は急に屈曲している。調査全長は約250cmを測るが、調査範囲が狭いため、その全容は不明である。溝の断面はU字状を呈しており、上面での幅は80cm前後、底面での幅は南西部では70cm、北上するに従って次第に狭くなり北東部では60cmを測る。確認面からの深さは26cm前後とほぼ水平である。

溝内の堆積土層は2層に大別でき、下層はロームブロックを混入する黒褐色土層、上層はロームブロックを多量に混入する暗茶褐色土層である。



第1号溝状遺構 (D区)

- 第1層 暗茶褐色土層
1~2mmのローム粒子を多く含み、炭化粒子を若干含む。粘性あまりなく堅緻。
- 第2層 黒褐色土層
第1層を基本とし5~10mmのロームブロックを含む。粘性ややあり堅緻

(図7) 第1号溝状遺構実測図

(2) 第2号溝状遺構

本遺構は第1号溝状遺構のやや南側に位置している。調査全長は約110cmを測るが、調査範囲が狭いため調査区西側にのびる部分が調査できず、その全容は不明である。溝断面はU字状を呈しており、上面での幅は西側部分で70cm、溝の先端部に近づくにつれて次第に狭くなり60cmを測る。確認面からの深さは35cm前後とほぼ水平であるが、先端部付近は若干浅くなる。

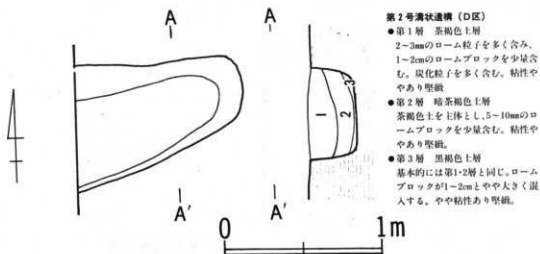
溝内の堆積土層は3層に大別でき、最下層はロームブロックを混入する黒褐色土層、その上にロームブロックを少量混入する暗茶褐色土層、最上層はローム粒子を多量に混入する茶褐色土層である。

第2号溝状遺構出土の遺物

土器底部(図9)

1 小形の壺形土器の底部である。内面には赤色塗彩が見られる。胎土には径1mm前後の砂粒が混入されている。色調は外面がにぶい橙色、内面が灰褐色を呈する。

2 壺形土器或は甕形土器の底部と思われる。外面にはヘラ状工具による調整、内面には櫛歯状工具による整形が行われている。色調は外面がにぶい橙色、内面はにぶい赤褐色を呈する。



(図8) 第2号溝状遺構実測図

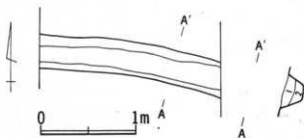


(図9) 第2号溝状遺構出土遺物実測図

(3) 第3号溝状遺構

本遺構は調査区のはほぼ中央に位置しており、西から東にかけてゆるやかに湾曲して走る溝である。調査全長は約190cmを測るが、調査範囲が狭く、その全容は不明である。溝の断面はU字状を呈しており、上面での幅は38cm前後、底面での幅は20cm前後とほぼ一定している。確認面からの深さは19cm前後とほぼ水平である。

溝内の堆積土層は基本的には1層であるが上下2層に細分でき、下層はロームブロックを混入する茶褐色土層、上層はローム粒子を多量に混入する茶褐色土層である。



(図10) 第3号溝状遺構実測図

第3号溝状遺構 (D区)

- 第1層 茶褐色土層
1mm以下のローム粒子を多く含む。粘性ありやわらかく緻密。
- 第2層 茶褐色土層
基本的には第1層に同じ。ローム粒子が3~4mmと大きく量も多い。5~10mmのロームブロックを若干含む。粘性あり緻密でやわらか。

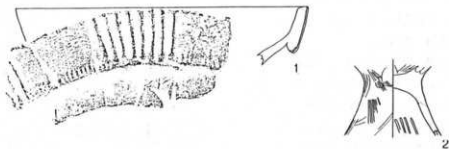
第3号溝状遺構出土の遺物 (図11)

壺形土器

1 複合口縁の土器である原体Rの網目状燃糸文で器面を装飾しており8つを一単位とする垂下した棒状隆起が数単位に見られる。また、口唇部直上には単節縄文L Rを横位に回転することによって得られる斜縄文が見られる。内外面とも風化が著しく、器面が荒れている。内面には少なくとも赤色塗彩が見られる。胎土には径0.5mm以下の砂粒を混入する。色調は内外面とも、にぶい黄褐色を呈する。

台付壺形土器

2 器面は著しく風化が進んでおり、櫛歯状工具による整形が若干観察できる程度である。胎土には径0.5mm以下の砂粒をやや多く混入する。色調は外面が褐色、内面は赤色を呈する。

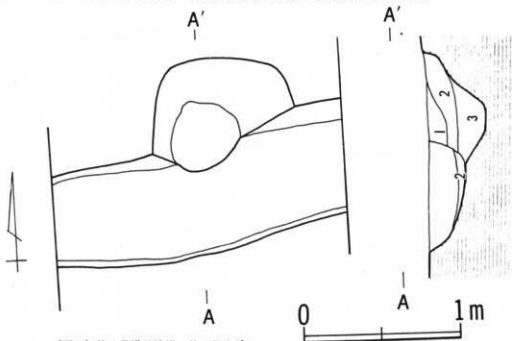


(図11) 第3号溝状遺構出土遺物実測図

(4) 第4号溝状遺構

本遺構は調査区南方に位置しており、東から西にかけて、やや湾曲して走る溝である。調査全長は約190cmを測るが、調査範囲が狭いため、その全容は不明である。本遺構は中央部付近において第8号土壌を切っている。溝の断面はU字状を呈しており、上面での幅は65cm前後、底面での幅は東側と西側では50cm、中央に近づくにつれて次第に狭くなり中央部では25cmを測る。

溝内の堆積土層は上下2層に大別でき、下層はローム粒子を多量に混入する暗黄褐色土層、上層はローム粒子を多量に混入し、かつ炭化粒子を若干混入する黄褐色土層である。



(図12) 第4号溝状遺構・第8号土坑

第4号溝状遺構 (D区)

- 第1層 黄褐色土層
2~3mmのローム粒子を多く含み、炭化粒子を若干含む。やや粘性があり堅緻。
- 第2層 暗黄褐色土層
2~3mmのローム粒子を多く含み、5~10mmのロームブロックを若干含む。やや粘性あり堅緻。

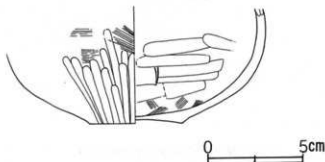
第8号土坑 (D区)

- 第1層 暗黄褐色土層
1~2mmのローム粒子を多量に含み、1~2cmのロームブロックを若干含む。粘性あり堅緻。
- 第2層 暗茶褐色土層
2~3mmのローム粒子を多量に含む。粘性あり堅緻。
- 第3層 暗黄褐色土層
2~3mmのローム粒子及び1~3cmのロームブロックを多量に含む。粘性あり堅緻。

第4号溝状遺構出土の遺物

土器底部 (13図)

壺形土器の底部破片である。櫛歯状工具による整形が行われた後、外面はヘラ状工具による縦位の研磨、内面には横位のナデが加えられている。胎土には径0.5mm以下の砂粒を混入する。色調は外面がにぶい黄褐色及び黒色、内面が灰色を呈する。



(図13) 第4号溝状遺構出土土器実測図

(5) 第1号土壌

本土壌は調査区の最も東北方に位置している。土壌東側は調査区域外のため調査できなかった。平面形態は階円形を呈するものと思われ、短軸を推定した規模は上面で長軸90cm、短軸約60cm、底部で長軸70cm、短軸約50cm位のものであろう。断面は皿状を呈しており、立ち上がりは急峻である。確認面からの深さは12cmを測る。

土壌内の堆積土層は2層に大別でき、下層はローム粒子を若干混入する暗茶褐色土層、上層はローム粒子を多量に混入する茶褐色土層である。

(6) 第2号土壌

本土壌は第2号溝状遺構の東南に位置している。土壌東側は調査区域外のため調査できなかった。平面形態は階円形を呈するものと推定されるが、規模は不明である。断面は皿状を呈しており、立ち上がりはゆるやかである。確認面からの深さは最も深いところで18cmを測る。

土壌内の堆積土層は上下2層に大別でき、下層はローム粒子を多量に混入する暗黄褐色土層、上層はローム粒子を多量に混入する暗茶褐色土層である。

(7) 第3号土壌

本土壌は第2号土壌の西南に位置している。土壌西側は調査区域外のため調査できず、全容は不明である。平面形態は円形を呈するものであると推定される。推定規模は上面で直径約100cm位のものであろう。断面は皿状を呈しているが、西側部分に一部落ち込みがある。東側の立ち上がりはゆるやかである。確認面からの深さは最も深いところで24cmを測る。

土壌内の堆積土層は上下2層に大別でき、下層はローム粒子を混入する茶褐色土層、上層は焼土粒子及び焼土ブロックを多量に混入する黒褐色土層である。

(8) 第4号土壌

本土壌は第3号土壌のやや南方に位置している。平面形態は階円形を呈している。土壌北壁は一部ビットに切られている。規模は上面で長軸100cm、短軸80cm、底部で長軸80cm、短軸65cmを測る。断面は皿状を呈しており立ち上がりは急峻である。確認面からの深さは最も深いところで25cmを測る。

土壌内の堆積土層は上下2層に大別でき、下層はロームブロックを少量混入する暗茶褐色土層、上層はローム粒子を多量に混入する黄褐色土層である。

(9) 第5号土壌

本土壌は第4号土壌のやや東南に位置している。土壌東側は調査区域外のため調査できず規模は不明であるが、平面形態は円形または階円形を呈するものと推定される。断面は皿状を呈しているが立ち上がりは急峻である。確認面からの深さは31cmを測る。

土壌内の堆積土層は上下2層に大別でき、下層はロームブロックを混入する暗茶褐色土層、上層はローム粒子を多量に混入する茶褐色土層である。

(10) 第6号土壌

本土壌は第4号土壌のやや南西に位置している。土壌西側は調査区域外のため調査できずその全容は不明であるが、平面形態は不整形の階円形を呈するものと推定される。短軸を推定した規模は

上面で長軸140cm、短軸約90cm、底部では長軸120cm、短軸約80cm位のものであろう。断面は皿状を呈しているが、北側では段を持っている。確認面からの深さは最も深いところで23cmを測る。

土壌内の堆積土層は上下2層に大別でき、下層はロームブロックを多量に混入する暗茶褐色土層、上層はロームブロックを多量に混入する茶褐色土層である。

(11) 第7号土壌

本土壌は第6号土壌のやや東南に位置している。土壌東側は調査区域外のため調査ができなかった。平面形態は階円形を呈するものであり、規模は上面で長軸110cm、短軸92cm、底部では長軸80cm、短軸50cmを測る。確認面からの深さは最も深いところで15cmを測る。

土壌内の堆積土層は1層のみで、ローム粒子を少量混入する茶褐色土層である。

D区土壌土層一覧

第1号土壌

- 第1層 茶褐色土層
3~5mmの橙褐色ローム粒子を多く含む。3mm以下の灰褐色土粒子を若干含む。粘性ややあり堅緻。
- 第2層 暗茶褐色土層
3~5mmの灰褐色土粒子を多く含む。3~5mmの橙褐色土粒子を若干含む。粘性あり堅緻。

第2号土壌

- 第1層 暗茶褐色土層
1~2mmのローム粒子を多く含む。焼土粒子および炭化粒子を若干含む。粘性ややあり堅緻。
- 第2層 暗黄褐色土層
第1層を基本とし、2~3mmのローム粒子を多く含む。粘性強く堅緻。

第3号土壌

- 第1層 黒褐色土層
砂質で、2~3mmの焼土粒子および4~5cmの焼土ブロックを多く含む。炭化粒子をまばらに含む。粘性なくやわらかい。
- 第2層 茶褐色土層
基本的には第1層と同じ。第1層に比べ3~5mmのローム粒子を含む。砂質で粘性なくやわらかい。

第4号土壌

- 第1層 黄褐色土層
3~4cmのロームブロックおよび3~5mmのローム粒子を多く含む。粘性なく堅緻。
- 第2層 暗茶褐色土層
5~10mmのロームブロックを少量含む。1~2mmのローム粒子を若干含む。粘性ややあり。

第5号土壌

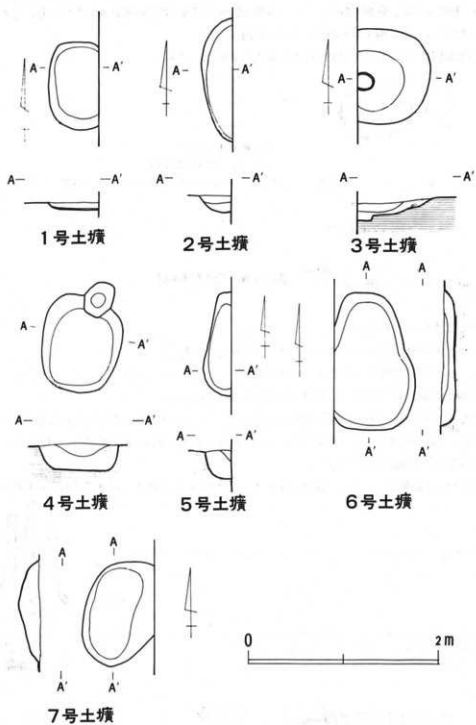
- 第1層 茶褐色土層
1~2mmのローム粒子を多量に含む。やや粘性あり堅緻。
- 第2層 暗茶褐色土層
1~2cmのロームブロックを少量含む。粘性あり堅緻。

第6号土壌

- 第1層 茶褐色土層
3~5mmのロームブロックを多く含む。2~3mmのローム粒子を少量含む。焼土粒子を若干含む。粘性なく堅緻。
- 第2層 暗茶褐色土層
第1層を基本とし、3~5mmのロームブロックを多く含む。粘性なく堅緻。

第7号土壌

- 第1層 茶褐色土層
1~2mmのローム粒子を含み、4~5cmのロームブロックを若干含む。焼土粒子をまばらに含む。粘性なく堅緻。



(图14) D区土坑实测图

(12) 第1号炉跡 (図15)

本遺構は調査区の最も南方に位置している。平面形態は隋円形を呈しており、規模は上面で長軸40cm、短軸34cm、底面で長軸28cm、短軸24cmを測る。断面は皿状を呈しており、立ち上がりは急峻である。確認面からの深さは4cmを測る。

炉址内の堆積土層は焼土層である明赤褐色土層1層のみである。



A— —A'



第1号炉跡 (D区)

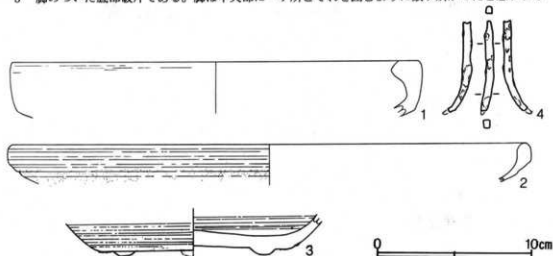
- 第1層 明赤褐色土層
焼土層である。炭化物を若干含む。粘性なく堅緻。

(図15) 第1号炉跡実測図

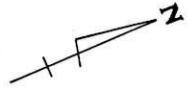
D区包含層出土の遺物 (図16)

D区から近世に位置付けられるホウロク及び鉄製角釘が出土している。

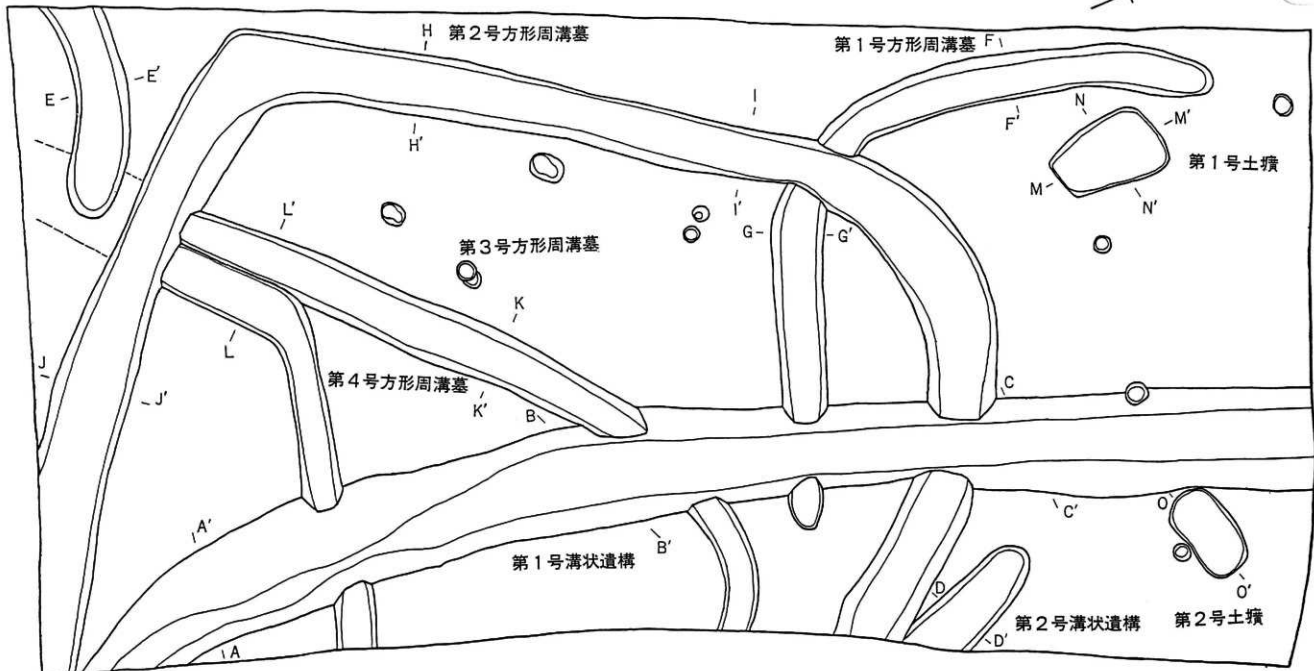
- 1 ロクロによって整形されたことが内面の整形痕より知られる。胎土には径0.5mm以下の砂粒及び白色不透明鉱物を混入する。色調は内外面とも灰色を呈する。
- 2 外面下半部に径0.5mm以下の砂粒が多く付着している。製作法を暗示している様にも思われるが、詳しい説明を加えることはできない。胎土には径0.3mm以下の砂粒を若干混入する。色調は外面は褐色、内面は橙色を呈する。
- 3 脚のついた底部破片である。脚は中央部に一ヶ所とそれを囲むように数ヶ所かっと思われる



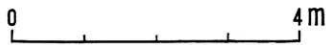
(図16) D区包含層出土遺物(1~3)及びピット内出土遺物(4)



第3号沟状遗构



(图17) E区全测图



が、この破片では一ヶ所に見られるだけである。胎土には径0.5 mm以下の砂粒を混入する。色調は内外面とも暗灰褐色を呈する。

4 D区最北のピットより出土した鉄製角釘である。

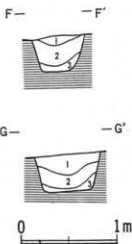
第3節 E区の遺構と遺物

(1) 第1号方形周溝墓 (図17・18)

本遺構は調査区の北方に位置しており、西溝および南溝を調査したものである。北溝および東溝は確認できず全体の規模は不明である。西溝は弧を描くようにやや湾曲しているが、南溝はほぼ直線的である。南西コーナー部付近はゆるやかに弧を描いている。このコーナー部は第2号方形周溝墓の西溝に切られており、さらに南溝東側は第1号溝状遺構に切られている。溝断面は箱型を呈している。上面での幅は西溝で55cm前後、南溝で60cm前後を測るが南西コーナー部は若干狭くなっている。底面の幅は西溝で45cm前後、南溝で55cm前後を測る。確認面からの深さは、南西コーナー部が最も深く50cm、西溝と南溝の先端部では浅くなり10cmを測る。南溝底面はコーナー部から東側先端部にかけて次第に浅くなるのに対し、西溝底面はコーナー部から溝中央部にかけて次第に浅くなるが、中央部から北側先端部にかけては急峻に立ち上がる。

本遺構における主体部の確認は残念ながらできなかった。

溝内の堆積土層は3層に大別でき、最下層はロームブロックを混入する茶褐色土層、その上にローム粒子および赤褐色粒子を多量に混入する暗赤褐色土層、最上層はローム粒子及び赤褐色粒子を少量混入する暗茶褐色土層である。



(図18) 第1号方形周溝墓土層断面図

第1号方形周溝墓 (E区)

- 第1層 暗茶褐色土層
1~2mmのローム粒子及び2~3mmの赤褐色土粒子を含む。やや粘性があり堅緻。
- 第2層 暗赤褐色土層
基本的には第1層に同じであるが、赤褐色土粒子は第1層に比べ多く含む。また1~2cmのロームブロックを若干含む。粘性なく堅緻。
- 第3層 茶褐色土層
2~3mmのローム粒子を多量に含み、1~2cmのロームブロックを若干含む。粘性やや強く堅緻。

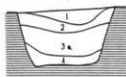
(2) 第2号方形周溝墓 (図17・19)

本遺構は調査区内中央よりやや北方から南方にかけて位置している。北溝と南溝の一部および西溝を調査した。東溝及び北溝と南溝の残りの部分は調査区域外の東側の市道にあたるため調査でき

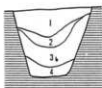
ず全容は不明であるが、今回調査した3基の方形周溝墓の中で最も大きく、最も方形周溝墓らしい形を呈しているものである。北溝、西溝、南溝はほぼ直線的である。北西コーナーはゆるやかに弧を描いているが、南西コーナーはほぼ直角に屈曲する。西溝は第1号方形周溝墓の南溝を切っており、南溝は第3号方形周溝墓西溝と第4号溝状遺構の南側を切っている。北溝は第1号溝状遺構により切られている。溝の断面は台形を逆にしたような形を呈している。上面での幅は北溝と南溝で100cm前後、西溝で80cm前後を測る。コーナー部付近は若干広くなり、北西コーナーは110cm、南西コーナーは120cmを測る。底面の幅は北溝で55cm前後、西溝で50cm前後、南溝では南西コーナーで50cmを測り東進するに従って次第に広くなり東側で70cmを測る。確認面からの深さは北溝で65cm、西溝で70cm、南溝では55cmを測る。

溝内の堆積土層は基本的には4層に大別でき、最下層はローム粒子を多量に混入する暗黄褐色土層、その上にローム粒子の包含量により細分できる暗茶褐色土層または黒褐色土層、その上に赤褐色土を多量に混入する暗赤褐色土層、最上層は黒色土ブロックを多量に混入する黒褐色土層である。

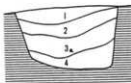
H — — H'



I — — I'



J — — J'



0 ————— 1m

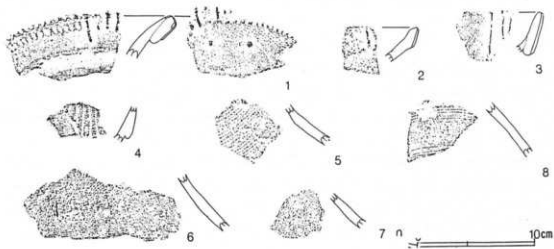
第2号方形周溝墓

- 第1層 黒褐色土層
暗茶褐色土を主体に黒色土ブロック(1-2cm)を全体的に多く含む。また、ローム・ブロック(1-2cm)を少量含む。やや粘性あり堅緻。
- 第2層 暗赤褐色土層
暗茶褐色土を主体に赤褐色土を全体的に多量に含む。やや粘性あり堅緻。
- 第3 a層 暗茶褐色土層
ローム粒子(1-2mm)を全体的に多量に含む。また、炭化粒子をまばらに含む。
- 第3 b層 黒褐色土層
ローム粒子(1-2mm)を少量含む。粘性あり。
- 第4層 暗黄褐色土層
ローム粒子(2-3mm)を全体的に多く含む、ロームブロック(1-2cm)をまばらに含む。赤褐色土ブロック(1-2cm)も全体的に少量含む。粘性が強く堅緻。

(図19) 第2号方形周溝墓土層断面図

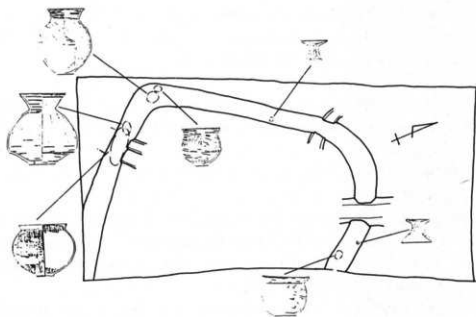
第2号方形周溝墓に於ける遺物の出土状況(図21)

第2号方形周溝墓出土の遺物の多くは底面より浮いた状態で出土している。しかも、縦横10×10cm以下の破片のものが多。また、完形土器及び図上復元可能な土器の中には、明らかに投棄され



(図20) 第2号方形周溝墓出土遺物実測図

たと思われるものもあり、南西コーナーで出土している2例の資料は中でも投棄された状態がよく表れたものと言えよう。これらの遺物はやはり床面からやや浮いた状態で出土している。器形のわかる土器で床面直上より出土しているものは僅かである。なお、第2号方形周溝墓出土土器の組成としては壺形土器、甕形土器、高坏形土器、器台形土器が見られ、甕形土器と台付甕形土器が主体を占めている。器台の存在にもかかわらず、埴形土器が全く出土していない点は興味深い。



(図21) 第2号方形周溝墓に於ける主な遺物の出土状況

第2号方形周溝墓溝内出土の遺物(図20~24)

甕形土器

(図22-2) 口径約18cm、器高約14cmを測る。外面は良く研磨されており、縦位或は斜位の調整痕を残す。内面には横位の調整痕が残されている。器面調整にはヘラ状工具を用いている様である。口縁部外側に稜が認められる。また、底部には靱の圧痕が見られる。胎土には径1mmから径2mm前後の赤色粒子を多量に混入している。外面の色調はにぶい黄褐色と赤色を基調としており、部分的に暗オリーブ灰色の斑点が見られる。内面はにぶい黄褐色を呈する。

(図22-4) 推定口径約14cm、器高約13.5cmを測る。外面は風化によって剥落し易くなっている。最大径は胴下半部に認められるが、本資料はこれを境として上半部と下半部が別々に作られ、最終的に両者が接合されて一つの個体を成している。その他、器形が樽円形を成している点も注意される。胎土には径1mm前後の赤色粒子及び径0.5mm前後の砂粒を混入している。外面の色調は暗褐色、内面はにぶい赤褐色を呈する。

(図22-3) 推定口径約20cm、現在高約23cmを測る。風化が著しく調整痕の観察できる箇所は口縁部の内面に限られている。口縁部は胴部に比較してやや厚手となっている。胎土には径1mm前後の赤色粒子と径0.5mm前後の砂粒を混入している。色調は外面が暗褐色、内面ににぶい赤褐色を呈する。

(図23-1) 口径約19cm、器高約20cmを測る。外面及び内面の一部には櫛歯状工具による整形が見られる。最終的な器面調整はヘラ状工具を用いて行われている。胎土には径1mm前後の砂粒を多く混入している。外面の色調は最大径よりも上部が赤色、下部が灰黄褐色を呈する。内面は最大径より上部がにぶい橙色、下部が灰黄褐色を呈する。

(図23-5) 推定口径約21cmを測る。櫛歯状工具による整形の後、口唇部直下に帯状のヨコナデを加えている。内面にはヘラ状工具による横位の調整痕が見られる。胎土には径0.5mmから1mm前後の赤色粒子が混入されている。色調は内外面とも浅黄色を呈する。

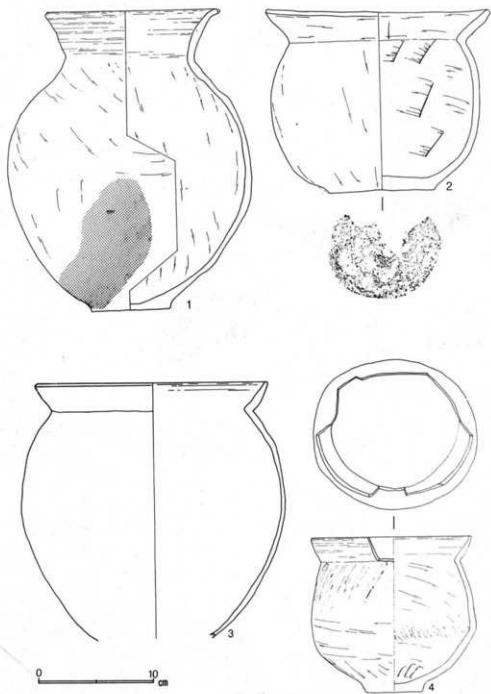
台付甕形土器

(図23-3) 口唇部にはヘラ状工具による刻みが見られる。外面は風化によって薄く剥落している部分が多い。胎土には径1.5mm前後の褐色粒子を混入する。色調は外面が暗褐色、内面ににぶい褐色を呈する。

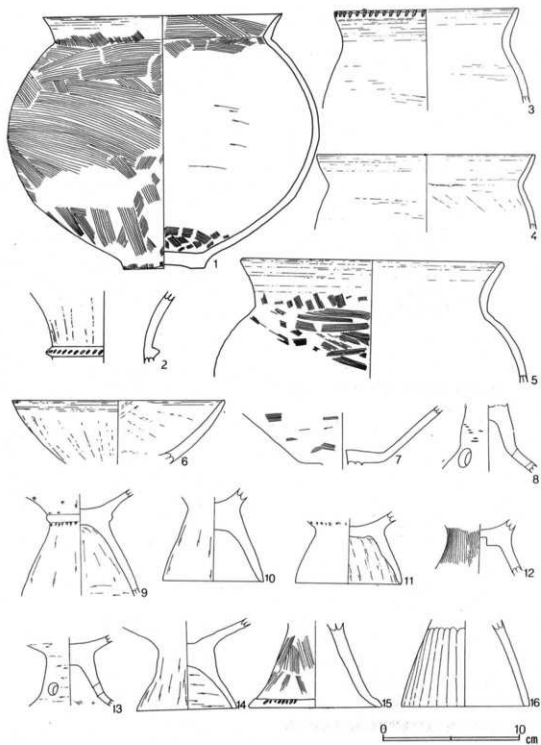
(図23-4) 推定口径約17.5cmを測る。内外面とも表面が薄く剥落している部分が多い。胎土には径0.5mm以下の白色微粒子を多く混入している。

(図23-9) 脚部の破片である。脚部の上半には帯状の隆起が見られる。粘土紐を貼付したのではなく、櫛歯状工具による整形の際に作作的に粘土を帯状に寄せたものであろう。最終的な器面調整はヘラ状工具によって行われている。胎土には径1mm前後の灰白色粒子及び径0.5mm以下の砂粒を含む。色調は外面が橙色、内面が浅黄褐色を呈する。

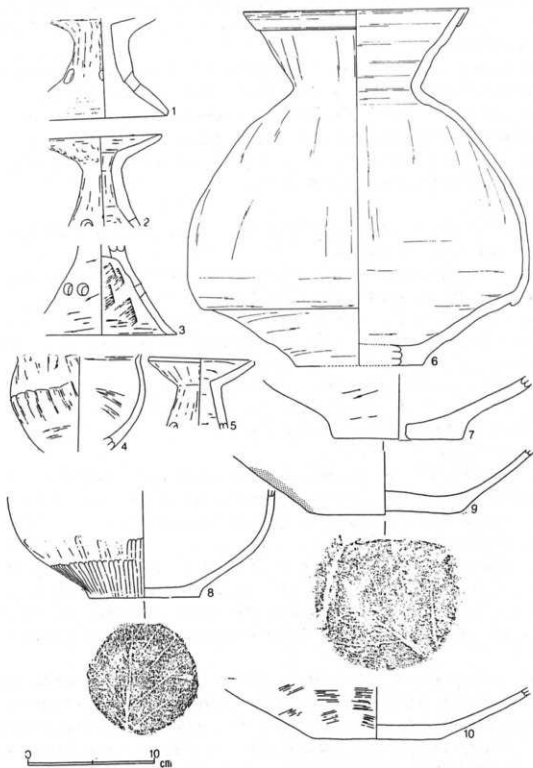
(図23-10) 内外面とも器面の磨滅によって調整痕が不明確である。胎土には径1mm前後の灰白色粒子を多く混入している。色調は内外面ともににぶい赤褐色である。



(图22) 第2号方形周溝墓出土土器実測図



(图23) 第2号方形周溝墓出土土器实测图



(图24)第2号方形周满墓出土土器实测图

(図23-11) 外面は風化によって調整痕が不明確である。内面には縦位に調整が加えられている。胎土には径1mm前後の赤色粒子及び径0.5mm以下の砂粒を混入している。色調は外面が赤褐色及び黒色、内面は赤褐色を呈する。

(図23-12) 櫛歯状工具によって整形を行っている。脚部断面中央には穿孔の痕跡が認められる。胎土には径0.5mm以下の砂粒を混入している。色調は外面がにぶい褐色、内面は淡赤橙を呈する。

(図23-14) 櫛歯状工具による整形の後、ヘラ状工具を用いて器面調整を行っている。胎土には径1mmから2mm前後の赤色粒子及び灰白色粒子を多く混入する。色調は内外面ともに灰褐色を呈する。

(図23-15) ヘラ状工具によって器面調整を行っている。胎土には径0.5mm以下の砂粒を混入している。色調は外面が明赤褐色、内面がにぶい赤褐色を呈する。

高坏形土器

(図23-6) ヘラ状工具によって内外面とも良く研磨されている。胎土には径1mm前後の赤色粒子を混入する。色調は内外面とも浅黄褐色である。

(図23-8) 三単位の穿孔が見られる。外面は良く研磨されており光沢を帯びている。胎土には径0.5mm以下の砂粒を混入する。色調は外面がにぶい褐色、内面は灰褐色を呈する。

(図23-13) 三単位の穿孔が見られる。外面から穿孔が行われている。外面はヘラ状工具によって良く研磨されている。内面には櫛歯状工具による整形痕が一部に残されている。胎土には径0.5mm以下の砂粒が混入されている。色調は内外面とも浅黄褐色である。

(図23-15) 櫛歯状工具による整形の後、ヘラ状工具による縦位の器面調整が行われている。脚部の下端は若干折返しであり、ヘラ状工具による刻みも見られる。胎土には径1mm前後の灰白色粒子を多く混入している。色調は外面が灰白色、内面が橙である。

壺形土器

(図22-1) 口径13.5cm、器高24cmを測る。胴下半部にはススの付着が見られる。ヘラ状工具によって器面調整がなされている。胎土には径1mm前後の赤色粒子及び径0.5mm以下の砂粒を混入している。極稀に径2mm前後の小石を混入する。色調は内外面とも赤褐色を基調としており、部分的に青灰色の斑点を交える。

(図23-2) 頸部破片である。最小径のやや下部に帯状の隆帯を貼付し、ヘラ状工具による斜位の刻みを入れている。外面にはヘラ状工具による縦位の調整、内面には同様の工具による横位の調整が加えられている。なお、ヘラ状工具による器面調整の前段階として櫛歯状工具による整形が行われていたことを示す痕跡も見られる。胎土には径0.5mm以下の砂粒を含む。色調は内外面とも明赤褐色を呈する。

(図24-6) 口径18cm、推定高28.5cmを測る。最大径は胴下半部にある。ヘラ状工具による調整痕が全面に見られる。器面には赤色塗彩がなされていたらしいが、顔料の残りが良くない為に赤色塗彩がなされた範囲を明確にしえない。少なくとも内外面の一部にその痕跡を見る。胎土には径1mm前後の灰白色粒子及び赤色粒子を含む。色調は内外面とも、にぶい褐色を呈する。底部穿孔の土器であろうと思われるが投棄されて破砕した状態で出土している。本資料のような土器は東海地方に多く見られるように思われる。

- (図20-1) 複合口縁を有する土器である。口唇部には刻み目が見られ、口唇部直上及び内面には原体不明の網目状塗糸文が施されている。また、土器の外面には棒状隆起、内面にはボタン状の貼付が見られる。外面に赤色塗彩の痕跡が残っている。胎土には径1mm前後の黄褐色粒子及び径0.5mm以下の砂粒を混入する。色調は内外面とも、にぶい橙色を呈する。
- (図20-2) 外面に棒状隆起の見られる土器である。外面は風化の為、調整痕を残さないが、内面には横位に調整痕を認めることができる。胎土には径2mm前後の灰白色粒子を含む。色調は外面がにぶい橙、内面は赤褐色を呈する。
- (図20-3) 複合口縁の土器であり結束第一種による羽状縄文(原体はLRとRLを結束させたもの)によって器面を装飾している。また、棒状隆起(単位不明)も見られる。内面には赤色塗彩がなされている。胎土には径2mm以下の黄褐色粒子を混入する。外面の色調は黄褐色を呈する。
- (図20-4) 複合口縁の土器であり、縦位の集合沈線文を有する。胎土には径2mm前後の赤褐色粒子を混入する。色調は内外面とも明赤褐色を呈する。
- (図20-5) 単節縄文LRを横位に回転することによって得られる斜縄文で器面を装飾している。内面にはヘラ状工具による横位の器面調整が見られる。胎土には径0.5mm以下の砂粒を混入する。色調は外面がにぶい橙色、内面は橙色を呈する。
- (図20-6) 結束第一種による羽状縄文(原体は器面の風化によって不明)によって器面を装飾している。内面にはヘラ状工具による横位の調整痕が見られる。胎土には径2mm前後の灰白色粒子を混入する。色調は内外面とも、にぶい橙色を呈する。
- (図20-7) 結束第一種による羽状縄文によって器面を装飾している。内外面とも風化が進んでおり、原体を明らかにすることはできない。胎土には径2mm前後の灰白色粒子を混入する。色調は外面がにぶい黄褐色、内面はにぶい橙色を呈する。
- (図20-8) 櫛歯状工具による文様をもつ土器である。内面に一部赤色塗彩が見られる。胎土には径0.5mm以下の砂粒を混入する。色調は内外面とも明褐色を呈する。
- (25)
(図23-7) 壺形土器の底部破片である。2つの破片が接合して一個体分となるが、本資料は底部穿孔土器の可能性が極めて濃い。器面調整はヘラ状工具によって行われたものと思われる。胎土には径1mmから径2mm前後の灰白色粒子を混入する。色調は内外面とも、にぶい橙色を呈する。
- (27)
(図23-8) 外面にはヘラ状工具による縦位の器面調整が見られる。底部には木葉痕が見られる。胎土には径2mm前後の赤色粒子を混入する。色調は外面がにぶい橙色、内面が灰白色を呈する。
- (27)
(図23-9) 内外面とも風化が著しい。底部には木葉痕が見られる。また、外面に一部ススの付着が見られる。胎土には径1mmから径2mm前後の灰白色粒子を混入する。
- (27)
(図23-10) 櫛歯状工具による整形痕を底部付近に残している。その後の器面調整はヘラ状工具を用いている。破片の上部には一部赤色塗彩が見られるが櫛歯状工具による整形痕の残る個所には塗彩されていない。胎土には径2mm前後の赤色及び灰白色粒子を混入する。色調は外面がにぶい橙色、内面が浅黄褐色を呈する。

器台形土器

- (24)
(図23-1) 器面特に外面をヘラ状工具によって良く研磨している。下半部には2つを一単位とする穿孔が

二単位見られる。穿孔は表面から行われている。なお、一ヶ所、径約1 cmの孔にクリーム色の粘土をつめこんで補修した個所が見られる。胎土には径2 mm前後の赤色粒子及び径0.5 mm以下の砂粒を混入する。色調は内外面とも橙色を呈するが、外面の一部には黒色の斑点が認められる。

(図23-2) 櫛歯状工具による整形の後、器面を内外面とも良く研磨している。1と同様に2つを一単位とする穿孔が二単位見られる。胎土には径0.5 mm以下の砂粒を混入する。色調は内外面とも暗褐色を呈する。

(図23-3) 内外面ともへら状工具による器面調整が見られる。2つを一単位とする穿孔が三単位見られる。穿孔は内面から行われているようである。胎土には径5 mm以下の砂粒を多く含む。色調は内外面とも明赤褐色を呈する。

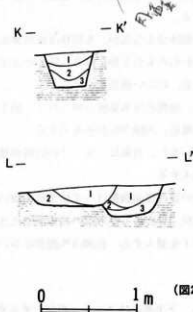
(図23-5) 外面をへら状工具によって良く研磨している。穿孔が三単位にわたって見られる。胎土には径1 mmから径2 mm前後の赤色粒子及び径0.5 mm以下の砂粒を混入する。色調は外面が灰赤色、内面が明赤褐色を呈する。

鉢形土器

(図23-4) 櫛歯状工具による整形の後、へら状工具による器面調整が加えられている。底部を欠如するが平底を成すものと思われる。径0.5 mm以下の砂粒を多く混入しており、色調は内外面とも赤色を呈する。

(3) 第3号方形周溝墓 (図17・25)

本遺構は調査区中央第2号方形周溝墓の中に位置しており、西溝と北西コーナー部を調査したものである。北溝及び東溝は調査区外の東側市道にあたるため調査することができず、また西溝南側南西コーナー部及び南溝は掘乱により確認できなかったため全容は不明である。西溝は南側第2号方形周溝墓と第4号溝状遺構により切れ、北西コーナー付近は第1号溝状遺構により切られている。西溝は中央部がややふくらみをもっており、コーナーに近づくにつれて次第に狭くなっている。



第3号方形周溝墓 (E区)

- 第1層 明茶褐色土層
1-2mmのローム粒子を多く含む、10mm以下のロームブロックを若干含む。また焼土粒子を若干含む。やや粘性あり堅緻。
- 第2層 黄褐色土層
1-2cmのロームブロックを多く含む、茶褐色土を少量含む。焼土粒子も多く含む。粘性強く堅緻。
- 第3層 暗茶褐色土層
1-2mmのローム粒子を多く含む、1-2cmのロームブロックを若干含む。粘性強く堅緻。

第4号溝状遺構 (E区)

- 第1層 茶褐色土層
1-2mmのローム粒子を多量に含む、焼土粒子を若干含む。また5-10mmのロームブロックを若干含む。やや粘性あり堅緻。
- 第2層 暗茶褐色土層
1cm以下のローム粒子を多量に含む、1cm以下のロームブロックを少量含む。また焼土粒子を若干含む。やや粘性あり堅緻。

(図25) 第3号方形周溝墓・第4号溝状遺構断面図

く。コーナー部はゆるやかに弧を描いている。溝断面は台形を逆さにしたような形を呈しており、上面での幅は中央部で80cm、コーナー部では50cmを測る。底面の幅は中央部で50cm、コーナー部では35cmを測る。確認面からの深さは中央部で40cm、北側で50cmを測る。西溝は北側から中央部にかけてやや落ち込んでおり、中央部から南側はほぼ水平である。

溝内の堆積土層は3層に大別でき、最下層はローム粒子を多く含む暗茶褐色土層、その上にローム粒子を多量に混入する黄褐色土層、最上層はローム粒子を多量に混入する明茶褐色土層である。

(4) 第1号溝状遺構 (図17・26)

本遺構は調査区内を南北に走る溝である。調査全長は約175cmを測るが、調査範囲が狭いため、その全容は不明である。本遺構は北側から中央部にかけてはほぼ直線的であるが、中央部から南側にかけては南東方向にゆるやかに弧を描いている。本遺構は第1、2、3号方形周溝墓および第4号溝状遺構を切っている。溝の断面はU字状を呈しており、上面での幅は北側で140cm、中央部で160cm、南側で120cmを測り、中央部はやはり出している。底面は北側から中央部あたりまでは直線的であり80cm前後で一定しているが、中央部から南側にかけては次第に狭くなり15cm前後を測る。確認面からの深さは55cm前後とほぼ水平である。

溝内の堆積土層は3層に大別でき、最下層はローム粒子を混入する暗褐色土層、その上にローム粒子および黒色粒子を混入する茶褐色土層、最上層は赤色微粒子を混入する褐色土層である。また一部最下層の下に赤色粒子を多少混入する褐色土層が見られる。

(5) 第2号溝状遺構 (図17・26)

本遺構は調査区の北東、第2号方形周溝墓の北に位置しており、南方に走る溝である。調査全長約160cmを測るが、調査区域外の南方にのびているものと考えられるため、その全容は不明である。溝の南側は第2号方形周溝墓の北溝により切られている。溝の断面はU字状を呈しており、上面での幅は最も広いところで80cm、北側先端部に近づくにつれ次第に狭くなり65cmを測る。底面での幅は南側で60cm、北側先端部付近で45cmを測る。確認面からの深さは南側で15cmを測るが、先端部に近づくにつれて次第に浅くなりゆるやかに立ち上がる。

溝内の堆積土層はローム粒子およびロームブロックを混入する茶褐色土層1層のみである。

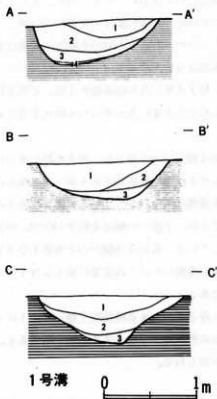
本遺構は断面形態および覆土から見て、方形周溝墓の溝の一部であると推定される。

(6) 第3号溝状遺構 (図17・26)

本遺構は調査区の最も南西に位置しており、東から西にかけて弧を描くように走る溝である。調査全長は約300cmを測るが、本遺構は調査区外西側へのびているため全容は不明である。溝断面はU字状を呈しており、上面での幅は145cm前後、底面での幅は100cm前後とほぼ一定している。確認面からの深さは45cmとほぼ水平であるが、東側先端部に近づくにつれて次第に浅くなりゆるやかな立ち上がりである。

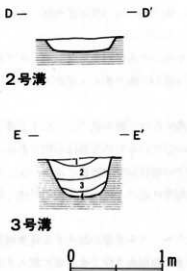
溝内の堆積土層は4層に大別でき、最下層はロームブロックを多量に混入する暗黄褐色土層、その上に赤褐色土粒子を少量混入する赤褐色土層、その上に赤褐色土粒子を多量に混入する暗赤褐色土層、最上層は黒色土ブロックを多量に混入する黒褐色土層である。

本遺構もまた、溝の断面形態および覆土から見て、方形周溝墓の溝の一部であると推定される。



第1号溝状遺構 (E区)

- 第1層 褐色土層
赤色微粒子を若干含み1~2mmのローム粒子を少量含む。やや粘性あり。
- 第2層 茶褐色土層
ローム粒子および黒色粒子を少量含む。やや粘性あり。
- 第3層 暗褐色土層
ローム粒子を少量含む。やや粘性あり。
- 第4層 褐色土層
5mm程度の赤褐色粒子を含む。粘性あり。
※4層は一部のみにもみられるものである。



第2号溝状遺構 (E区)

- 第1層 茶褐色土層
1~2mmのローム粒子及び1~2cmのロームブロックを含む。粘性ややあり堅緻。

第3号溝状遺構 (E区)

- 第1層 黒褐色土層
暗茶褐色土を主体とし、1~2cmの黒色土ブロックを多量に含む。粘性なく堅緻。
- 第2層 暗茶褐色土層
暗茶褐色土を主体とし、赤褐色土を多量に含む。やや粘性あり堅緻。
- 第3層 赤褐色土層
基本的には2層に同じであるが、赤褐色土を含む。やや粘性あり堅緻。
- 第4層 暗黄褐色土層
茶褐色土を主体に1~2cmのロームブロックを多量に含む。粘性強く堅緻。

図26 第1・2・3号溝状遺構断面図

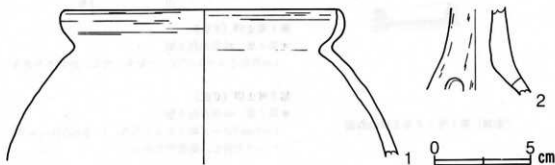
第3号溝状遺構出土の遺物(図27)

壺形土器

1 ヘラ状工具による器面調整が加えられている。口縁部がやや内湾することを特徴としている。胎土には径0.5mm以下の砂粒を混入する。色調は外面がにぶい橙色、内面は橙色を呈する。

器台形土器

2 櫛歯状工具による整形の後、ヘラ状工具によって器面をよく研磨している。四単位の穿孔が見られる。胎土には径0.5mm以下の赤色粒子を混入する。色調は内外面とも暗赤褐色を呈する。



(図27) 第3号溝状遺構出土遺物実測図

(7) 第4号溝状遺構(図17)

本遺構は第3号方形周溝基西溝の南方に位置しており、東から南西にかけて走る溝であるが、第3号方形周溝基西溝にあたったところで「く」の字状に屈曲するものである。調査全長は約600cmを測るが、東側は調査区外へのびており、南西部分は攪乱により確認ができず、その全容は不明である。本遺構は西側で第3号方形周溝基を切っており、南西部分は第2号方形周溝基に、また、東側は第1号溝状遺構により切られている。溝断面はU字状を呈しており、上面での幅は東西に走る溝で60cm前後、北東から南西にかけて走る溝では90cm前後とほぼ一定している。底面での幅は前者が35cm前後であり、後者は70cm前後とほぼ一定している。確認面からの深さは20cm前後でほぼ水平である。

溝内の堆積土層は上下2層に大別でき、下層はローム粒子を多量に混入する暗茶褐色土層、上層はローム粒子を多量に混入する茶褐色土層である。

(8) 第1号土壌

本土壌は第1号方形周溝基西溝の東側に位置している。平面形は隅丸の不整形長方形を呈しており、上面での幅は長軸100cm、短軸100cmを測る。底面での幅は長軸140cm、短軸90cmを測る。土壌断面は皿状を呈しており、内壁の立ち上がりは急峻であるが、北壁はゆるやかに立ち上がっている。確認面からの深さは最も深いところで20cmを測る。

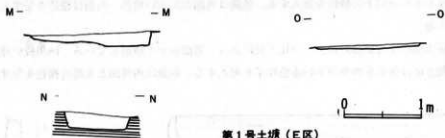
堆積土層はロームブロックを混入する暗茶褐色土層1層のみである。

(9) 第2号土壌

本土壌は第1号溝状遺構北東部のやや東に位置している。平面形は隅丸の長方形を呈しており、

上面での幅は長軸 160 cm、短軸 140 cm、底面での幅は長軸 75 cm、短軸 60 cm を測る。断面は皿状を呈しており、立ち上がりは急峻である。確認面からの深さは 10 cm を測る。

堆積土層はロームブロックを含む暗茶褐色土層 1 層のみである。



(図28) 第1号・2号土坑断面図

第1号土坑 (E区)

- 第1層 暗茶褐色土層
1 cm 程度のロームブロックを多く含む。粘性ややあり

第2号土坑 (E区)

- 第1層 暗茶褐色土層
1~2 mm のローム粒子を多く含み、1~2 cm のロームブロックを含む。粘性ややあり。

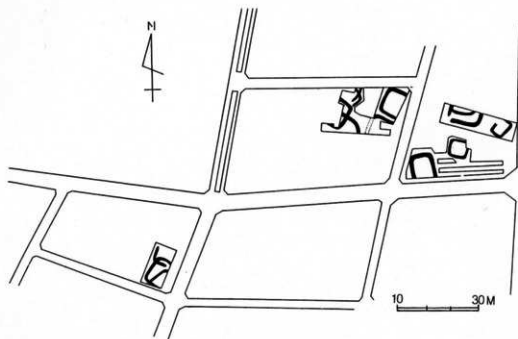
第3章 まとめ

今回の発掘調査では、方形周溝基(方形周溝基と推定される溝状遺構を含む)が6基、そのほか土塊、炉址等が検出された。これらは、いずれも戸田市教育委員会が実施した第1次、2次発掘調査で確認されたものと出土遺物や遺構の形状が類似している。

現在、この遺跡域のほぼ中央部を「東北・上越新幹線並びに通勤新線」の工事に伴い(財)埼玉県埋蔵文化財調査事業団が昭和57年度から発掘調査を実施しており、住居跡25軒、方形周溝基72基、溝状遺構141基、土塊 103 基や井戸跡等が検出されている。さらに調査が進むにしたがって多数の遺構・遺物が発見されるものと期待されている。この調査で、特に注目すべき遺物では、高床式倉庫に使用されたと思われる梯子、斧の柄などの木製品が、埼玉県で初めて検出されており、この遺跡の質の高さが証明されてきている。

戸田市文化財調査報告Ⅱ「鍛冶谷・新田口遺跡」の中で、方形周溝基の分布、形態、終末期等の研究課題が提起されたが、今回の一連の発掘調査では、それらは基本的に変っていない。ただ、低湿地における共同体の研究方向は、新たな問題提起があるであろう。今後、新幹線関連の調査報告をまっとう一層燃え上るものと思われる。

今わかっていることは、この鍛冶谷・新田口遺跡においては、方形周溝基が遺跡域いっばいに分布して築造されていて、居住区と墓域とが明確に区分できないことである。これは、他に生活の場をもとめることのできない低地内の自然堤防上の生活がいかに不安定であったかを物語っている。しかし、荒川河口という好位置のためか、遺物は東海地方の影響をうけたいわゆる外来系土器もみられる。



(図29) 鍛冶谷・新田口遺跡に於ける方形周溝墓の分布図

古墳時代前期前半、すなわち4世紀末から5世紀初頭に展開された鍛冶谷・新田口遺跡では、地の利を生かし、外来の文化を一早く摂取し、この時代ここに定住したのであるが、これより荒川上流台地上に、より強力な族長層が出現するとその傘下に組みこまれていったのである。

註1 塩野 博・伊藤和彦「鍛冶谷・新田口遺跡—方形周溝墓群の調査—」戸田市文化財調査報告Ⅱ 昭和44年3月

註2 若松良一・西口正純「戸田市鍛冶谷・新田口遺跡の調査」「第17回遺跡発掘調査報告会発表要旨」 昭和59年3月

Handwritten marks and symbols, possibly including the number 28 and other illegible characters.



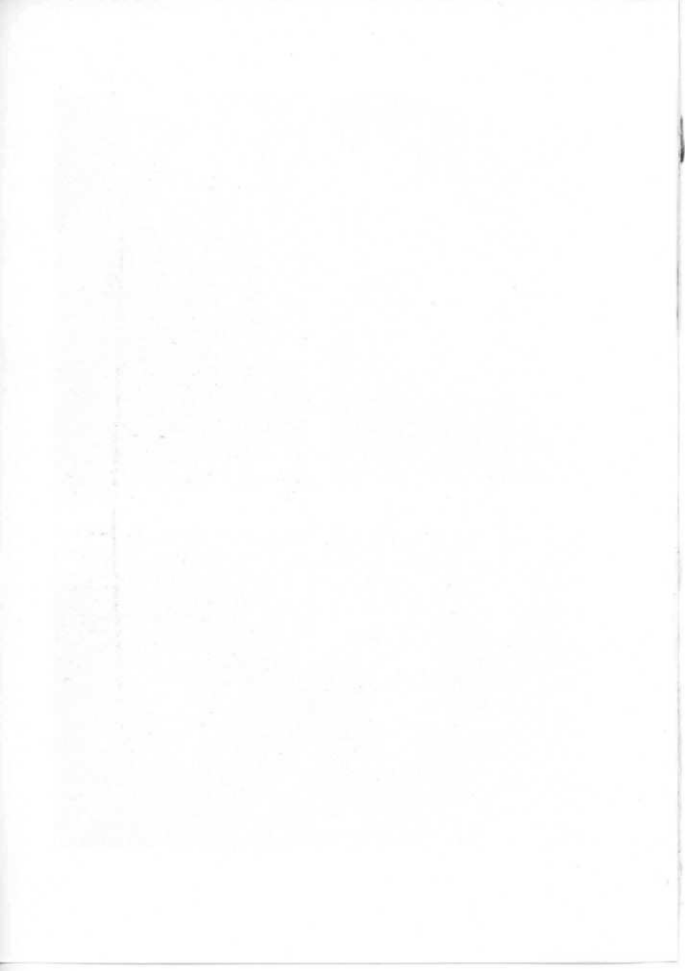
C区全景



D区全景



E区全景





E区第1号方形周溝墓



E区第3号方形周溝墓



E区第2号方形周溝墓遺物出土狀態



E区第2号方形周溝墓遺物出土狀態





壶形土器



壶形土器



壶形土器



壶形土器



高环形土器



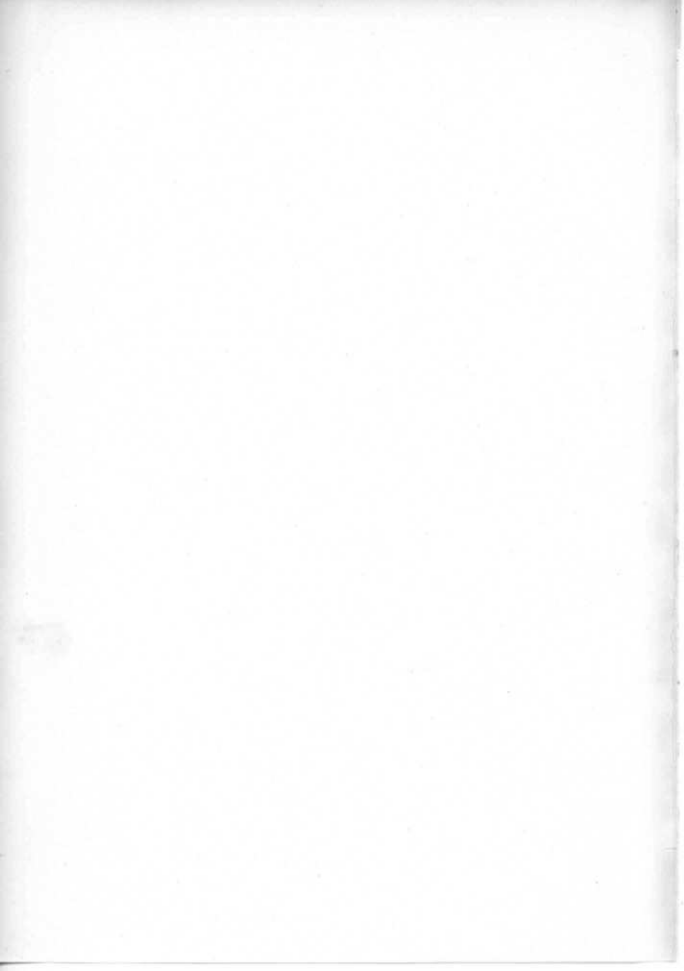
器台形土器











印刷 昭和59年 3 月25日

発行 昭和59年 3 月31日

戸田市文化財調査報告 XV

鍛冶谷・新田口遺跡第3次発掘調査概要

発行 埼玉県戸田市教育委員会

印刷 ヤマダ印刷株式会社